

孝子教鈔解



136  
124

東 京 圖 書 館			
四	一	一	教
一	九	〇	訓
冊	號	架	類
			和 書 門

008221-000-6

136-124

孝子教鈔解

高井 蘭山/著

M14

AAC-0095



高井蘭山講解

孝子教鈔解

明治十四年九月新雕



孝子教鈔叙

内藤氏藏

孝悌の道、國家の至寶なり。去天明戊申秋葉

忠和を尊ぶ人、孝子教を述ぶ。去精温故堂於版行。

愚其人を知らざれば、皆儒書とて、按て經傳の語あり。

一向も佛敎を用ひ、按むるに唐山、蒙求標題千文。

三字經、四子經の割符、韻語を目也、暗記、母便あるを。

家、ふ存て孝悌を勉む。君を仕へ友に交する。忠信仁義。

高井蘭山講解

孝子教鈔解

明治十四年九月新雕



内藤氏藏

孝子教鈔叙

内藤氏藏

孝悌の道、國家の至寶なり。去天明戊申秋葉  
 忠和、孝子教を述ぶ。去精温故堂於版を  
 愚其人を知らざれば、皆儒書とて、按て經傳の語あり。  
 一向も佛敎を用ひ、按ざるに唐山蒙求標題千文  
 三字經四字經の數語、韻語と目せ、暗記便を以て  
 家におきて孝悌を勉む。君を仕へ友に交ふ。忠信仁義

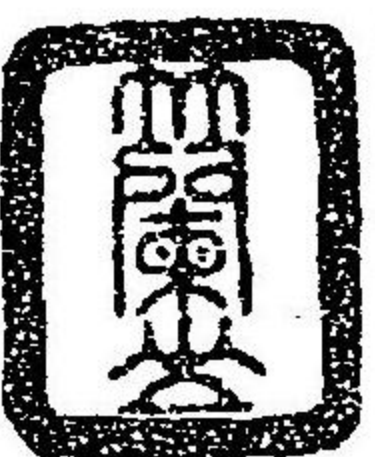
孝子教鈔

孝子教鈔叙

為人の體を盡し。措ふの教。語を盡し。ばんりとも。  
 凡そ此の徳書。比され。麦粟稲米の美。小並ぐり。凡  
 どじ。今茲抄解して。兒童には。易の比むと云。

江府南郊。其伊。四子。女。隱士。高井。蘭山。叟。誌。

天保七丙申夏至



丁馬を於て。本。文。と。よ。み。て。あ。る。か。ら。り。書。を。か。ん。合。せ。り。な。つ。け。り。と。よ。み。ば。丁。馬。に。お。け。り。を。
 讀法
 右。記。を。於。て。孝。子。の。一。篇。を。辨。也。も。民。の。家。あ。る。べ。し。實。語。教。孝。子。教。の。た。ら。ひ。は。あ。り。

孝子教

夫孝ハ百行の  
 源又萬善ハ長  
 也。

孝子教

孝ハ親のよきことと親のんにあることとむ。  
 孝子教。孝子のせしむべきものなり。

夫孝ハ百行の源又萬善ハ長也

夫とハ貴族の稱も。物と云ハ。人。姑。小。魚。と。云。之。親。小。孝。の。す。べ。し。
 よ。あ。い。の。お。か。あ。ひ。の。源。なり。水。の。流。を。出。る。の。と。い。新。て。海。川。と。廣。く。
 又。その。う。に。之。百。子。方。百。事。と。なる。と。最。等。一。由。長。と。云。長。と。い。
 と。孝。子。は。何。れ。の。わ。ど。も。孝。行。も。孝。行。も。誠。も。その。ま。ま。と。い。ふ。べ。し。なり。

忠者自孝出 孝至徳要道

忠ハ人。今。車。の。道。を。し。り。孝。より。出。され。忠。臣。孝。子。の。門。は。忠。と。い。ふ。
 孝。と。い。ふ。不。忠。の。た。今。ある。と。孝。徳。の。要。の。た。孝。徳。は。出。ら。る。徳。

孝子女少解

先親小事んと欲する者ハ朝

ハ早起て盥

漱

心と正して顔

色と和げ父母

の安否を問

夕小は笑語と

樂ま令其寢處

と安ず可

先欲事親者朝早起盥漱

先親に事んと欲者朝ハ早起て盥漱ハ

正心和顔色問父母安否

心を正して顔色を和げ父母の安否を問

夕小は笑語と可安其寢處

夕小は笑語と可安其寢處

凡為人子禮冬温而夏涼

凡人の子爲の禮ハ冬ハ温小

而夏ハ涼也

出ハ則ち必ず

方と告反ハ則

ち必む面を以

てす又時刻を過不

孝子文抄解

習所必ず業有  
恒の言老を稱  
せ不

孝子の深愛有  
和氣愉色有

又婉容有也嚴  
威儼恪なる者  
親に事る所以  
小非凡人の子

習所必ず業有  
恒の言老を稱  
せ不

孝子の深愛有  
和氣愉色有

又婉容有也嚴  
威儼恪なる者

親に事る所以  
小非凡人の子

又婉容有也  
嚴威儼恪者  
非所以事親  
凡為人の子者

爲者ハ

居尤則ち奥に  
主とら不坐ハ  
則ち席に中せ  
不

行則ち道小中  
せ不立則ち門  
に中せ不

又婉容有也といふは、かたがた物やいふふ柔和なるなり  
嚴ある威儼儼小恪世小法礼と云格あるを及せしは  
儀い却て輕にはくまするにわらひ親小窮屈せし  
むるは、似たり凡人の子とら者ハ

居則不主奥座則不中席

奥とい母親此とある人の子に坐に席のま中にあり  
らば、まんなら成た右へさぐりて坐せし

行則不中道立則不中門

道をゆくを中とせ、成た右へさぐりて坐せし  
邪魔小あらぬやうあり

聲無に於聽矣  
形無小於見矣

等閑に高小登  
不聊爾又深に  
臨不

友に許す小死  
を以せ不敢て

聽於無聲矣見於無形矣

親の位に於小種親の形も見ざる肉に於小種す  
心を司せバ親の名を奉じ司使のすこやりあんとに

等閑不登高聊小不臨深

等閑に高小登不聊小不臨深に  
閑はままにしぐ之今日も的目も等く系あんとある油巧  
不聊爾又深に  
友に許す小死  
を以て不敢て

不許友以死敢不私其財

其財を私せ不

又敢く私小假  
不又敢て私に  
與不

我意を以て逆  
こと勿也調諛  
と以く事こと  
勿也

任成通ざる友は我種又依く生命を抛と士ハ  
とに多し一れも親をてけ才成失は誰れ親を養  
らん我種又依く生命を抛と士ハ  
親の指圖を持ち

又不敢私假又不敢私與

父の材をれば父の材が任成通ざる者なりとも私小假として  
又おく私に與は若按る時に親小假し事を辨すべ

以我意勿逆以調諛勿事

我意を以て逆として調諛を以て事を以て事を  
孝いあるを以て逆として調諛を以て事を以て事を

我意ハ争論の本調諷ハ久と能不。

業を修して懶惰するを勿と行餘力有バ則

師を擇て以て文学べ。詩賦

るに親を教のたふあは業和正を以順後親を速あらはあづふ流るいた之種為一怡もむいまごの不並なり

我意争論本調諷不終久

我私の意を張る争論の中調諷ハ誠の意より出ひた一旦人と視むくめて久しにたふ

修業勿懶惰行有餘力則

素讀を藝そ外何の業を修けりするとも倦く懶惰こと勿るべし孝悌の心ひり力あはるる

擇師以文学勿先他詩賦

と作て成先といふ也。

聖賢の意を按可父召則ち諾するを無

先生召バ諾するを無唯而即

師を擇び文学と修けり詩賦成化することを先すべくはみだのたふ偏の差列人の人なるを學ぶと肝要なり詩文を成先すれば名人と呼ぶ其早業の用の方公より早く本内免べけれ今日の教は遠より君子の道は遠く

可按聖賢意父則無諾

學問ハ賢人賢人教の意を問ひて辨るを第一とす一愚凡人より君子のたふ入るべきを解は詩賦小限るは字學顔學頗多端之なれり愚る小唯ハ遠小諾ハ君の意ハ父呼ぶ唯して誤世にあり之を師道又曰以上礼記の文を小學也又論語亦の語之

先生召無諾唯而即起矣



起矣

手に業を執き  
之を投じ食口  
に在る之を吐

走而趨不矣父  
母之と愛をれ  
則ち喜而之を  
忘不父母之  
惡則懼而之  
怨るも莫と父

先生の色より長者大人と云視師道とに在る時ハ深する事  
唯と忽て即起是支那の礼法之紀より此に在るを後せんが為

手に業を執く居るに投する物をたうべしれはそそのは即

そそのは即そそのは即そそのは即そそのは即そそのは即

走而不趨矣父母愛之則

喜而不忘之父母怒之則

懼而莫怨之父母有過則

必下氣怡色柔孝而必諫

諫者不入則勿逆於父母

走いふ疾く趨い走り後之父母覺て嬉しく喜ぶ忘れ父母

怒るも莫と怨るも莫と父母有るは必し下

起敬又起孝若悦則復諫

父有諫子則不陷於不道

母過有とバ則  
氣を下色を怡  
あうして聲成  
柔小而以之諫  
諫若不入バ  
則父母に於逆  
ふと勿れ

起て敬一又起  
て孝せよ若悦

バ則復諫上父

諫子有バ則不

孝子有バ則不

誼小於陷不。

孝子の親に事  
る者。居小ハ  
則其敬と致養  
一ハ其樂致。  
病バ則其憂と  
致喪ハ則其哀  
と致。祭小ハ則  
其嚴と致。五の

誼小於陷不。又起て孝せし起ハ礼儀之親悦  
むる復いさめよ父誼子子おれハ不誼不隨にハ孝經小出らる  
禮之以上礼記曲礼ハ出らる語と小学ハ引らる禮賢の語と  
以く句く又ハ論語小出らる語あり 誼ハ義と同字

孝子事親者居則致其敬

養則致其樂 病則致其憂

喪則致其哀 祭則致其嚴

不者能備矣 然後云事親

者能備て矣 然  
後親に事と云。

能父母に事  
者ハ上小居而  
驕不。下と爲而  
亂不。衆又在而  
爭不上に居て  
驕とば則凶下  
と爲亂とば則  
刑せしれ。衆に

孝子の親小つふまはる家居の時ハ敬を致し居小ハ平  
好あり而の樂を致し病の時ハ憂をいさめ  
不孝小して喪ふと起ハ哀をいさめ祭の時ハ嚴致さるる  
又ハ能備て親に事るといふ

能事父母者居上而不驕

為下而不乱 在衆而不爭

居上猶約亡 為下乱則刑

在衆衆則兵 此三者不除

七

有て争バ則兵  
せらる。此三の  
者除不バ。日に  
美食を用と雖  
猶不孝と爲也。

世俗之所謂不  
孝ある者五有  
其四肢を情而  
父母の養或顧

雖日用美食猶為不孝也

然父母に事する者の上に居て猶下と為て乱と成大勢に交  
在る争に上に居て猶下と為て乱と成大勢に交  
せられ元不在て争バ兵せらる兵と刀劍槍薙刀此母物  
もか兵器之け三の者除せられ日に美食或顧を以て  
とて不孝と爲る之上に居る一玉の君軍のものは  
る人刑にせらるるを押しられ絶目ふ内ふ之

世俗之所謂有不孝者五

情其四肢而不顧父母養

一之不孝也博奕好飲酒

二之不孝也不顧父母養

三之不孝也好財私妻子

四之不孝也不顧父母養

五之不孝也

業も四肢の働成るこれを怠るは孝の人間に成る業を  
かこつてて父母の養を顧ざる一の不孝之博奕と六緒と酒成  
るの父母に養を顧ざる二の不孝之財を好し妻子を私して  
父母の養或顧ざる三の不孝之

不<sup>一</sup>之不<sup>一</sup>孝也  
博<sup>一</sup>奕<sup>一</sup>酒<sup>一</sup>を<sup>一</sup>飲<sup>一</sup>  
を<sup>一</sup>好<sup>一</sup>父母<sup>一</sup>の  
養<sup>一</sup>或<sup>一</sup>顧<sup>一</sup>不<sup>一</sup>二<sup>一</sup>此  
不<sup>一</sup>孝也<sup>一</sup>財<sup>一</sup>を<sup>一</sup>好<sup>一</sup>  
妻子<sup>一</sup>に<sup>一</sup>私<sup>一</sup>を<sup>一</sup>  
て<sup>一</sup>父母<sup>一</sup>の<sup>一</sup>養<sup>一</sup>或<sup>一</sup>  
顧<sup>一</sup>不<sup>一</sup>三<sup>一</sup>之<sup>一</sup>不<sup>一</sup>孝<sup>一</sup>  
也<sup>一</sup>

耳目之欲を従ふ。以て父母の戮を爲す。四之不孝也。勇を好んで鬪狠を以て父母を危はす。父母を危はす。五之不孝也。夫五刑之屬。三千。而其罪。不孝より於大あるハ莫。

從耳目之欲以爲父母戮

四之不孝也 好勇鬪狠而

以危父母矣 爲之不孝也

夫五刑之屬 三千而其罪

莫大於不孝

父母の危はすを大罪と爲す。鬪鬪大罪。尚書に刑の篇に之を凡て三子條罪と爲す。不孝より大あるハナシ。

父母生之也 嗣續莫大焉

君親臨之也 其厚莫重焉

故不愛其親 却而愛他人

謂之悖德也 不敬其親而

却而敬他人 謂之悖禮也

敬せ不而却而  
他人と敬まる  
之我悖禮と謂  
也

夫此身也矣父  
母之遺體あり  
父母の遺體を  
行敢て以て敬  
せ不乎居莊ら  
不ハ孝小非

己身父母これを生也  
相續するこれより大なる  
他人と敬まる之我悖禮と謂  
敬ふと礼と悖と云悖禮と悖礼と云會黙に是あることなり  
人備のたにわらば是孝經ふある語也

夫此身也矣父母之遺體

行父母遺體敢以不敬乎

居不莊非孝君不忠非孝

君に忠あら不  
ハ孝小非官敬  
せ不ハ孝小非  
友に信なら不  
ハ孝小非陳に  
勇無ハ孝小非  
親戚悦不ハ則  
敢て外に交不  
也近者親不則  
敢く遠を求不  
也小ある者審  
小せ不ハ則敢

官不敬非孝友不信非孝

陳無勇非孝親戚不悦則

不敢外交也近者不親則

不敢求遠也小者不審則

不敢言大也

君子の人の見ぬ所も戒慎人の知る所も不忌懼はこれ君子の  
及ぶる所の人の見ぬ所も戒慎人の知る所も不忌懼はこれ君子の

て大と言不也。

あはれ忠臣の孝子の門下は、公の勅を敬せざるは、  
 孝ふは、友に信あふぬとの約せし、公と交むれば、  
 信實なる人の為にあらず。文中、文と約とをいひ、  
 信實なる人の為にあらず。文中、文と約とをいひ、  
 不依の孝にあらざる。陳小陳く勇なく、後病小迹、  
 親親縁若小、陳小陳く勇なく、後病小迹、  
 續りてあらず。近者親を、遠小求小、  
 大と云は、物にすぎく近より遠小及、  
 皆礼記に出るを、小学に教へる。句うて、  
 此末も同ト

故人の生也。譬バ百歳之内。又疾病有焉。又老幼有焉。是故

故人の生也。譬百歳の内。又疾病有焉。又老幼有焉。

小孝子者。其復を可不とを思て。

是故孝子者。思其不復

故といふに、云々のごとく、ゆゑあつたことと、  
 たといふ百年の留世を経た不時の病あり、  
 老といひて世の勤もたぬ留せざる。これに、  
 聊の間にこのゆゑに孝子の復すべく、  
 人の生也

先孝悌を施可。親戚既小没せば。則孝を欲ても。誰爲に孝せん。年既小耆父あらず。則悌を

先の親孝悌。親戚既没。則孝悌誰為。年既小耆父。則悌誰為。

欲しても誰か  
為に慄せん故  
小孝も及不  
有慄も又時か  
ら不と有官ハ  
官成に於怠病  
ハ小愈小於加  
禍ハ懈惰に於  
生ト孝ハ妻子  
に於衰能此四  
の者と察して  
終或慎と必始

悌又有不時官怠於官成

病加於小愈禍生於懈惰

孝衰於妻子終家此四者

慎終必如始

孝其年若て六十と艾六十と耆と云け時情を思ふとも誰か  
勉んされば孝も及ぶるあり情の時あぶるあり士官の身ハ官  
成就するに意あり病ハ少く愈小加り禍ハ懈惰小進孝ハ妻  
子の先ニ著ハ終官ハ官成ハ多しなり常四の者と察し終と

の如せよ。

大哉孝也矣天  
下國家治り身  
脩而安心なり  
一身脩不バ則  
孝と爲と能不  
也虚哉執也も  
盈と執ガ如虚  
に入ども人有  
ガ如孝子ハ一  
たび足を舉も

懐むと必む始の如くせよすべ物の始心と臣丁寧に熟切れ  
ども孝ハ懐むハ人の終と懐む始とくせよと海切の教也

大哉孝也矣天下國家治

身脩而安心一身不脩則

不能為孝也執虚如執盈

虚如有人孝子一舉足

不敢忘父母是故行不恒

敢て父母を忘  
不。是故に行小  
徑せ不。親の遺  
體を傷んを  
恐てあり。

一たび言を出  
と雖又敢て父

# 恐傷親遺體

大ある哉孝也夫と云  
一たびの終る成るあげさ  
そなた天下の事も治り一人者而くの身も備て一統  
安んじたり一身備らばれば孝と為る終る虚を執ると  
身を執ると虚に入ると人あがらぬ心とにありすの  
言も敢てせざり孝子の一たび言と奉ても父母を忘  
小学にいふ君子の門人樂正子春一たび言とあげても  
父母の遺體を傷つんは我恐ると云い別けは又福は  
故人をほりや子游云流落威明といふ者も小徳に  
はとありなれば成ればほりすも君子はとらば

# 一雖出言又不敢忘父母

母我忘不。忽言  
身に反さ不。父

忽言不反身恐辱父母也

母を辱んと我  
恐て也。惡い小

忌小勿為之善小勿不為

ありても之を  
為る勿善い小

君子之行若靜以可修身

なとどを為不  
と勿君子之行

儉可養德非用淡泊也

者靜以て身と  
脩可。儉以て徳

不能以明志恥以寧靜則

と養可。淡泊を  
用る小非れバ

不能以教遠



則以て志を明  
みするに能不  
寧靜を以て  
に非ざる則以  
て遠致致と能  
不。

云とつゝいふ念根の云を身に及び父母代傳めんて成  
忍むるを忍み小とせこれとをたかれば若し小ありともなるを  
なるは是れ是れ蜀の昭烈皇帝元徳天子劉禪を教へし語  
三國志小澤之君子の心静しとて静しとて静しとて静む  
俗に徳を養ふに漢唐を用ひたれば徳を明にせんと  
終に漢いあり居らうに徳を養ふに徳を養ふに徳を養ふに  
日これ食料衣料より器械一切に奢侈を去り徳を養ふに徳を養ふに  
寧靜を以てせらるるにあらば遠く徳を養ふに徳を養ふに徳を養ふに  
いふ徳は徳を養ふに徳を養ふに徳を養ふに徳を養ふに徳を養ふに  
是と云ふ徳を養ふに徳を養ふに徳を養ふに徳を養ふに徳を養ふに  
むより徳ありといふ徳も是も徳を養ふに徳を養ふに徳を養ふに徳を養ふに  
遠く徳を養ふに徳を養ふに徳を養ふに徳を養ふに徳を養ふに徳を養ふに

孝子之祭也必  
身親之に莅故  
有バ人小使て  
可あり夫齋之  
日者其居處と  
思矣其嗜所  
思矣其樂一所  
思矣其笑語  
を思矣是如も  
色バ則肅然と  
して其音聲と

孝子之祭也必身親莅之

有故使人可夫齋之日者

思其居處矣思其所嗜矣

思其樂矣思其所笑矣

思其笑語矣思其音聲

如聞之音聲如見其容貌

聞か如其容貌  
と見が如

是故に孝子者  
色目小乎忘不

孝子に孝と稱ふは必ず親之に徳故あり人小使  
るも可なり是ハ疾病又身に瘡ある時糲汁の標  
あり自ら勅難くれば之丈齋する此日ハ孝人存世  
樂に西を思ひす思ふを思ひす歎ひしり〜  
思ふ思ふの如くそれを南終りて孝者ありせしめ  
容貌と見が如〜  
不礼に亡灵此平生を思ひつけ一孝通ぬればか  
南終一室小満充り福終ふ孝と在らざる〜  
孝祀末格と説く孝右に在らざる〜

是故孝子者色不忘乎目

聲耳に乎忘不  
心志嗜欲者心  
に乎忘不也身  
體髮膚者之  
父母に受也敢  
て毀傷不者是  
孝之始也身を  
立而道を行名  
を後世小於揚  
以て父母を顯  
者則孝之終也

聲不忘乎耳 心志嗜欲者

不忘乎心也 身體髮膚者

受之父母也 不敢毀傷者

是孝之始也 立身而行道

揚名於後世 以顯父母者

則孝之終也

故に孝ハ親に  
事小始君に事  
に於中身  
立小於終也孝  
子の父母に事  
若くハ侍坐小

心に忘るゝハ前云々祭齋の時より平生の顔色を  
察何れハ侍坐小思て忘るゝハ終發膚之れ  
父母の遺體なれば毀ひ傷らば父母命より生きたる  
してこの身を及ぼさるれば孝の始より身世に立く君  
子此乃成行ひ名を後の世まぐ残し父母の名を光るハ  
孝の終あり是れ若子此孝經に出る語あり

故に孝始事親中於事君也

終於立身也孝子事父母

若侍坐有過父怒必擊之

過有父怒之  
を撃んと欲  
小箠ハ則過  
待以て其怒  
宥んが爲かり  
大杖ハ則逃走  
暴怒の過有ん  
ことを恐てなり

小箠ハ則過爲宥其怒

大杖則逃走恐有暴怒過

故に孝ハ親小事小始君に出て君に事するに中より身を  
立小終る孝子の父母に事する若坐小侍り色あやしく父  
怒て之を撃んと欲す小箠ハ色を付大杖ハ逃走する暴怒  
の色あやしく是れ若子ハ孔門の一貫せし言事  
あれども父の命を瓜を転おやまらざるを切らぬ  
むちうの若子逃ば杖杖孔子これにけりハ父色を  
打殺さば不慈の名をのこさん何ぞ逃ばして父の名  
を始さんとするやとて怒て若子に過ありとせり

是故小大孝者  
不父の罪を犯  
えぬ不烝の  
孝を失不米を  
百里の外小負  
藜藿を食て親  
成養孝子者之  
と樂に徒車百  
乘有菽粟萬鍾  
と積褥成累而  
坐と雖親在の  
時に如不

是故大孝者不犯不父罪

不失烝孝負米百里外

食藜藿養親孝子者樂之

有徒車百乘積菽粟萬鍾

雖累褥而坐不如親在時

是故に大孝の父に不犯の罪に如くはと化よりいそ  
する格なる斗ひいせぬ之烝の孝をなすに藜の父替

孝子ハ能思を  
盡レ。樹者静あ  
らんと欲而吹  
風之を停不。子  
者養いんと欲  
而親年を於待

暇の故車なり米を百里の遠に負い子路孔門の才子そ  
性你孝の人よそ人に在る米成負藜藿の兼食一と  
親を養ひ故孝子者今運にうあひ富を樂と後  
車百乘成行一菽粟萬鍾を積褥を累成坐と  
親を養時とちがひ万金を數あふぬ親ふあふ孝の  
子とらその情なり種とふ教の名

孝子能盡思樹者欲靜而

吹風不停之子者欲養而

親不待於年但不乘者年

不往來不者  
八年方見再見  
難者ハ親ナリ  
二親之壽命忽  
隙を過ク如矣

故に親小事  
と欲する者徒  
に日を過可不  
男女媒有非  
とバ名を相知  
不矣幣受

難再見者親二親之壽命

忽如過隙矣  
孝子の能親を思ふ心成るに  
樹ハ静あらんことを欲されども

而吹風之を傳げ子ハ親を養ふと欲ども而も親年を過るに  
来ふるハ年再見難クハ親之壽命忽ち隙を過るがごとし

故欲事親者不可徒過日

男女媒有媒不相知名矣

不有受幣約不交又不親

婚禮万世始告之以直信

信者事人也信者婦德也

一與之齊則終身不改也

に有不バ則交  
不又親不婚禮  
ハ萬世の始之  
を告に直信成  
以す信者人に  
事る也信者婦  
の徳也一とび  
之と齊まれば  
則身を終まぐ  
改不也

幣とハ妻を迎ふる意の儀也これを交はれば交は又親ハ婚禮ハ  
妻を要すは是を教と傳ふる万世の始也正也信實を以互に  
隔心也信人に事ると婦ハ夫ハ以ハ夫婦ハ互に  
信實とすハ夫事之婦の徳也信實ハ又夫の一ツ誰も形ハ互に  
別く夫婦ハ約しとを交はるるればいふく信を徳とハ一とび之を  
齊し一生涯改むハけ身を終るまで信成て徳を影とす

妻ハ子孫を求  
んが爲ふ。嗣  
有ハ何ぞ妻を  
求人。家吏を治  
を思不して。  
徒に妻妾を愛  
する者ハ。是争  
亂之本。豈慎不  
可ん哉。

妻ハ子孫を求  
んが爲ふ。嗣  
有ハ何ぞ妻を  
求人。家吏を治  
を思不して。  
徒に妻妾を愛  
する者ハ。是争  
亂之本。豈慎不  
可ん哉。

妻ハ子孫を求  
んが爲ふ。嗣  
有ハ何ぞ妻を  
求人。家吏を治  
を思不して。  
徒に妻妾を愛  
する者ハ。是争  
亂之本。豈慎不  
可ん哉。

妻ハ子孫を求  
んが爲ふ。嗣  
有ハ何ぞ妻を  
求人。家吏を治  
を思不して。  
徒に妻妾を愛  
する者ハ。是争  
亂之本。豈慎不  
可ん哉。

妻ハ子孫を求  
んが爲ふ。嗣  
有ハ何ぞ妻を  
求人。家吏を治  
を思不して。  
徒に妻妾を愛  
する者ハ。是争  
亂之本。豈慎不  
可ん哉。

妻ハ子孫を求  
んが爲ふ。嗣  
有ハ何ぞ妻を  
求人。家吏を治  
を思不して。  
徒に妻妾を愛  
する者ハ。是争  
亂之本。豈慎不  
可ん哉。

妻ハ子孫を求  
んが爲ふ。嗣  
有ハ何ぞ妻を  
求人。家吏を治  
を思不して。  
徒に妻妾を愛  
する者ハ。是争  
亂之本。豈慎不  
可ん哉。

妻ハ子孫を求  
んが爲ふ。嗣  
有ハ何ぞ妻を  
求人。家吏を治  
を思不して。  
徒に妻妾を愛  
する者ハ。是争  
亂之本。豈慎不  
可ん哉。

以て親に事。孝  
名無者有。是友  
を撰不バ也。故  
に入てハ。則篤  
行。出てハ。則  
以賢に交。弓  
調て後。勁を求  
馬服して後。良  
を求む。士ハ。慤  
して後。智を求  
慤せ不而多能  
あるハ。之を射

有無孝者。是友  
を撰不バ也。故  
に入てハ。則篤  
行。出てハ。則  
以賢に交。弓  
調て後。勁を求  
馬服して後。良  
を求む。士ハ。慤  
して後。智を求  
慤せ不而多能  
あるハ。之を射

有無孝者。是友  
を撰不バ也。故  
に入てハ。則篤  
行。出てハ。則  
以賢に交。弓  
調て後。勁を求  
馬服して後。良  
を求む。士ハ。慤  
して後。智を求  
慤せ不而多能  
あるハ。之を射

有無孝者。是友  
を撰不バ也。故  
に入てハ。則篤  
行。出てハ。則  
以賢に交。弓  
調て後。勁を求  
馬服して後。良  
を求む。士ハ。慤  
して後。智を求  
慤せ不而多能  
あるハ。之を射

有無孝者。是友  
を撰不バ也。故  
に入てハ。則篤  
行。出てハ。則  
以賢に交。弓  
調て後。勁を求  
馬服して後。良  
を求む。士ハ。慤  
して後。智を求  
慤せ不而多能  
あるハ。之を射

有無孝者。是友  
を撰不バ也。故  
に入てハ。則篤  
行。出てハ。則  
以賢に交。弓  
調て後。勁を求  
馬服して後。良  
を求む。士ハ。慤  
して後。智を求  
慤せ不而多能  
あるハ。之を射

有無孝者。是友  
を撰不バ也。故  
に入てハ。則篤  
行。出てハ。則  
以賢に交。弓  
調て後。勁を求  
馬服して後。良  
を求む。士ハ。慤  
して後。智を求  
慤せ不而多能  
あるハ。之を射

狼に於譬

強惡ハ近可不  
是故コ農夫者  
先耘テ後増ト  
加否則荒草茂  
却而種類ト害  
す病ハ良藥ニ

人ハ若ク此友ニヨリク智カトモ愚カトモ別ルベクハ由是ニ知ル  
入テハ篤ク以テ以テ出テハ賢者ニ交リ友トシテ以テ以テ後  
勁トモ亦弱ク弱トモ亦強トモ強トモ亦弱トモ弱トモ亦強トモ  
人ハ別ガリ用キテ服スルハ人ハ別ガリ服スルハ士ハ熱トモ定  
熱トモ定テ多熱トモハ熱トモ定テ多熱トモハ熱トモ定テ多熱トモ  
定テ多熱トモハ熱トモ定テ多熱トモハ熱トモ定テ多熱トモハ熱トモ

強惡不可近 是故農夫者

先耘後加増 否則荒草茂

却而害種類 病不勝良藥

勝不災ハ善行  
小勝不凡文事  
有者ハ必武備  
有矣又武事有  
者ハ必文備有  
矣

災不勝善行 凡有文事者

必有武備矣 又有武事者

必有文備矣

増を加ハ不烈荒草茂トテ日用スルニ種類トモ害ヲ  
これ強惡トモ近クベクハた之ニ之利ノ難ヲ延却テ  
穀種ノ害トナル病ハ良藥トモ退ラシテ災ハ善行トモ勝ル  
祇ハ徳ニ勝ルトモ云モ以テ之凡文事トモ有者ハ必武備あり  
た傳トモ出ス傳トモ文トモ盛ナリ人ハ武トモ定テ多熱トモハ熱トモ  
世俗ノ意トモ文ノ為トモ委トモこれハ論中経理成ル

鏡ハ形を察る  
所以古ハ今を  
知所以今ハ來  
と知所以なり。  
今無是バ去來  
無多言ハ徳之  
賊多事ハ生之  
讐ふり。謂と勿  
れ何の傷と有  
んと其災禍將

病と云ふは我ふ授て命を惜み自然と武備を之武のも  
其枝に建てる福あれば文備もあつて

鏡所以察形 古所以知今

今所以知來 無今無去來

多言徳之賊 多事生之讐

勿謂有何傷 其災禍將長

勿謂有何害 其災禍將大

に長ぜんと將  
謂と勿れ何の  
害と有んと其  
災禍將に大な  
らんと將

謂と勿と聞者  
無と鬼神將に

鏡ハ形を察る所以古ハ今を知所以今ハ來と知所以なり。今無是バ去來無多言ハ徳之賊多事ハ生之讐ふり。謂と勿れ何の傷と有んと其災禍將に大ならんと將

勿謂無聞者 鬼神將何人



人と伺んと將  
涓涓とる流壅  
不バ終に是江  
河と爲毫末小  
して拔不ハ則  
後將に斧柯と  
用んと將誠に  
能之と慎バ則  
是福之根也。

涓涓と流不壅終是為江河

毫末不拔則後將用斧柯

誠能慎之利是福之根也

涓涓と流壅塞されハ涸も川も廣がる毫末なる時拔れ  
されハ忽ち大本となりて成退んとすれば斧や柯あるのみ  
を利ハ人更大勢あり其の退るに滅小終ち其肉に  
窮るは大事に及ぶと後悔して及ばんと心付ハ油  
油ハ心と利するたと之より引く福の根本と云世の中此と  
油ハ心と利するたと之より引く福の根本と云世の中此と

説者ハ辨に於  
流聽者ハ辭小  
於亂此二の者  
と知とハ則道  
以て忘可不夫  
寢處時あらず  
又飲食節あらず  
不して逸勞過  
度の者ハ疾病  
共小之と殺

説者流於辨聽者亂於辭  
知此二者則道不可以忘  
寢處不時又飲食不節  
逸勞過度者疾病共殺之

辨者者の説ハ河の涓涓と流壅聽者は  
周の七の時獲秦張儀合縱連衡として六五成合を奉と

下位小居て上  
と犯嗜欲を好  
て厭と無而求  
く止不者ハ刑  
戮共に之を殺  
少を以而衆戎

亡びんとせられ合殿を破て秦一由成して六宮を滅さんと  
たつるつる前辨小流ると祥に礼との言と初て先王の道と  
あるとくば夫孫受討あつて女を逃げ飲食をわらばいの  
ふの時ふば殺と居てすむとたを逃るやせらゆかかといひ  
たりわの初と自分の持前小類を度にはるると云度いれど  
のころの女を小ふりすむものい初小犯され死とまひく

居下位犯上好嗜欲無厭

而求不止者刑戮共殺之

少而犯衆以弱而犯強

犯弱を以而強  
を犯忿怒類せ  
不者ハ兵卒共  
小之を殺此三  
死ハ命小非人  
自之を取也

忿怒不類者兵卒共殺之

些三死非命人自取之地

下位小居て上を犯しあはれ嗜欲を好く厭となく而も求て其る  
者とく此れ分限を忘る我意に決り欲ふく積るといふを  
こびおるは控勢して奪ふごとくいやが上とせつりの畜て止むら  
刑ふひあひひ殺しころころ少とは人殺小勢之流といふ人殺  
多と弱を以て強を犯し忿怒を法にあつてむらむらと殺せ  
と云法忍あるとも忽ふたえうぬる軍を流率す小これと  
殺は以上の三死ハ命にあつてはるる死をいとむる孟子に  
命を知者ハ巖墻の下に立ば控横して死する者ハ命小

若智士仁人は。身を將に必節有。動靜義小背不。喜怒又時を以て。故に其生を害するを無壽伐焉得と云と雖亦宜から不乎也。仁恕者徳を樹嚴暴者

あはれとけり桂横はてしありと訓令鞫ると囚人の逃走ぬ  
格よ打もの悪を犯し刑せらるるに命にあはれと

若智士仁人 將身必有節

動靜不背義 喜怒又以時

故無害其生 雖得壽焉

不亦宜乎也 仁恕者樹徳

嚴暴者樹怨 君子之道者

怨を樹君子之道者貴と雖必時有君子ハ三怒有。

雖貴必有時 君子有三怒

若智ある士も仁ある君子も身を節に必節を辨ふ勅も  
静あり居も我小背はれも怒も又時を以て示極忽

よらこびいさるる伐せばゆゑに生を害するをば長壽をたれも  
宜あはれや仁い人をあはれを怒いけり人の心をけり方より

たむらふ是れ人もや小思んを推し其事をせは大學之契矩  
の道之論語に夫子の道に忠恕の二身をはめりて人のことを

知る是れ仁恕徳を樹嚴暴は怒を樹らあると云はらうあつと  
云へば仇もをい同らう怒らうと云はらうと云はらうと云はらう

う怒とがはる後うも又うゆると云はらうと云はらうと云はらう  
怒とらう怒と君子のた貴といふも必時あり君子ハ三怒あり

君有て事と能  
不臣有て其使  
と求親有て孝  
るを能不子有  
て其報を求兄  
有て敬と能不  
弟有て其順を  
求此三の者ハ  
恕に非能三恕  
の本を明小せ  
バ身成端と矣  
謂可

有<sup>テ</sup>君不能事<sup>ル</sup>乃<sup>レ</sup>臣求其使<sup>ス</sup>

有<sup>テ</sup>親不能孝<sup>ル</sup>有<sup>テ</sup>子求其報<sup>ス</sup>

有<sup>テ</sup>兄不能敬<sup>ル</sup>乃<sup>レ</sup>弟求其順<sup>ス</sup>

此三者非恕<sup>ニ</sup>能明三恕<sup>ヲ</sup>奉<sup>ル</sup>

可謂端身<sup>ト</sup>矣<sup>ナリ</sup>

求親を考ると終に子ありて其報を求む身のはとめ小を  
が兒是君に近侍して介抱の手業ふくともつらに二つハ一

小人之言語ハ  
君子に同と乎  
有察せ不ある  
可不也君子ハ  
行を以て言小  
人ハ舌を以て

小人之言語有同乎君子

不可不察也君子以行言

小人以言言不觀高山大谷

親ありて侍ふ侍り孝はとも命小隙なくい乞も妨あり子ありて  
報を求むも同は是と見ありて教するに終不弟われは行を勤  
まづと思へども止がて子細をいひせんたとい我場小隙て君の  
る小付死せ親を考せんといはれは忠臣に死せれ親の孝は兒  
弟の我子の役目とて思考を命いけむる時たけし之の若し恕はこれ  
終三恕のたせぬとせしめぬといはれは忠臣を端すといふ也

言高山の崖を  
觀不ば何ぞ顛  
墜の患を知ん  
深泉の淵を觀  
不ば何ぞ没溺  
の患を知ん巨  
海の遠を觀不  
ば何ぞ風波の  
患を知ん今也  
之或失する者  
其此小在不乎

何如顛墜患不觀深泉淵

何如没溺患不觀巨海遠

何如風波患今也失之者

其不在乎  
小人の言語、君子に因てあり  
此の患、小人の言に由りて  
論語云、水洊洊にして、疾風を欲する、君子のむらに

論語云、水洊洊にして、疾風を欲する、君子のむらに  
云、洊洊の及まば、死を魂て、言ふ山の崖を見れば、顛とさるる、まふ  
墜とさるる患とあらず、深泉の淵を觀ずば、没溺とさるる患とあらず、

此三の者を慎  
ば則身小於累  
無矣身に禮を  
用不而却て禮  
を人小於望身  
に徳を用不而  
却て徳を人に  
於望是亂之端  
也思不ばある  
可不也

慎此三者則 魯累於身矣  
慎此三者、則魯累於身矣  
此三の者、を慎むれば、則ち身に累は無く、身に禮を用ひず、而も却て禮を人に用ひず、

身不用禮而 却望礼於人

身不用徳而 却望徳於人

是亂之端也 不可不思也

此の三の者、を慎むれば、則ち身に累は無く、身に禮を用ひず、而も却て禮を人に用ひず、

忠信非自  
則以親取  
可無外相  
應不以此  
信取可無  
人君困不  
王成見不  
烈士困不  
行彰見不

化より教をんをを我身徳を用は却て他人の徳をんを  
空の礼の端の内我がらるをうりと思はむんはあはば

自非忠信則無可以取親

内外不相應無可以取信

人君不困則不見成王也

烈士不困則行不見彰也

忠に依あらざるより親を取がじ心の内と外に依あらざるを  
身ふり不と回報あらぬ信を取がじ徳を言と行と回報らざる

夫満を持に道  
有聰明睿智に  
而之を守に愚  
蒙を以て功天  
下伐被と雖之  
を守に信讓を

人君困まざればとありれば烈士といふを言はれしは言まざれば  
世の教を人君の嫡子、王とある言なれば三國蜀の漢を劉禅  
秦の二世皇帝の治世世の治世の治世の治世の治世の治世の治世  
周の文王は子武王は漢の劉邦は漢の劉邦は漢の劉邦は漢の劉邦  
呉の伍子胥は楚の伍子胥は楚の伍子胥は楚の伍子胥は楚の伍子胥  
ての故國外患あらばとてはつきに七と出たり

支持満有道聰明睿智而

守之愚蒙功雖被天下

方之信讓勇力雖據世

以<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>勇力世<sup>ニ</sup>小  
振<sup>レ</sup>と雖<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>を守<sup>ル</sup>  
に怯弱<sup>ヲ</sup>を以<sup>テ</sup>す。  
富<sup>ニ</sup>四海<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>と  
雖<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>を守<sup>ル</sup>小<sup>ニ</sup>卑  
謙<sup>ニ</sup>戎<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>す。

耻<sup>ヲ</sup>と知<sup>ル</sup>者<sup>ハ</sup>道<sup>ニ</sup>  
小<sup>ニ</sup>近<sup>ク</sup>一<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>平<sup>ニ</sup>安  
か<sup>ラ</sup>不<sup>レ</sup>其<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>  
之<sup>ノ</sup>耻<sup>也</sup>也。家<sup>ノ</sup>事<sup>ノ</sup>齊<sup>ニ</sup>

守<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>怯弱<sup>ヲ</sup>富<sup>ニ</sup>維<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>四海<sup>ニ</sup>

方<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>算<sup>ス</sup>謙<sup>ニ</sup>

充<sup>ル</sup>海<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>聰<sup>明</sup>の<sup>ノ</sup>膚<sup>ノ</sup>智<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>も</sup>す<sup>レ</sup>公<sup>レ</sup>而<sup>テ</sup>智<sup>ヲ</sup>通<sup>ス</sup>之<sup>レ</sup>を<sup>も</sup>公<sup>ニ</sup>  
及<sup>ニ</sup>に<sup>テ</sup>象<sup>ヲ</sup>と<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>物<sup>ヲ</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>も</sup>す<sup>レ</sup>て<sup>も</sup>久<sup>ク</sup>な<sup>ク</sup>功<sup>ノ</sup>天<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>彼<sup>ト</sup>

い<sup>レ</sup>ども信<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>讓<sup>ス</sup>て<sup>レ</sup>功<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>世<sup>ノ</sup>勇<sup>力</sup>世<sup>ニ</sup>に<sup>テ</sup>振<sup>ル</sup>項<sup>羽</sup>樊<sup>噲</sup>の<sup>ノ</sup>ど<sup>と</sup>  
とい<sup>レ</sup>ども怯<sup>ク</sup>弱<sup>ト</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>も</sup>富<sup>ニ</sup>海<sup>ニ</sup>を<sup>も</sup>保<sup>ル</sup>る<sup>ニ</sup>卑<sup>ニ</sup>謙<sup>ニ</sup>を<sup>も</sup>以<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>

知<sup>ル</sup>耻<sup>者</sup>近<sup>ク</sup>道<sup>ニ</sup>一<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>平<sup>ニ</sup>安<sup>ニ</sup>

其<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>齊<sup>ニ</sup>者

其<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>耻<sup>也</sup>疾<sup>病</sup>與<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>學<sup>也</sup>

其<sup>ノ</sup>身<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>耻<sup>也</sup>志<sup>意</sup>不<sup>レ</sup>正<sup>者</sup>

不<sup>レ</sup>德<sup>ト</sup>耻<sup>也</sup>親<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>過<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>諫<sup>也</sup>

孝<sup>子</sup>之<sup>ノ</sup>耻<sup>也</sup>

ふ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>其<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>耻<sup>也</sup>疾<sup>病</sup>と<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>學<sup>也</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>も</sup>身<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>耻<sup>也</sup>疾<sup>病</sup>を<sup>も</sup>不<sup>レ</sup>諫<sup>也</sup>  
風<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>教<sup>有</sup>る<sup>レ</sup>べ<sup>シ</sup>一<sup>ノ</sup>冉<sup>伯</sup>牛<sup>ノ</sup>け<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>疾<sup>病</sup>を<sup>も</sup>あ<sup>レ</sup>ば<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>幸<sup>ト</sup>とい<sup>ふ</sup>

て<sup>レ</sup>天<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>為<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>ある<sup>レ</sup>花<sup>ノ</sup>を<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>ん<sup>が</sup>せん<sup>案</sup>ず<sup>る</sup>不<sup>レ</sup>恥<sup>也</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>も</sup>公<sup>ニ</sup>公<sup>ニ</sup>志<sup>也</sup>  
急<sup>ニ</sup>い<sup>ふ</sup>ん<sup>が</sup>せん<sup>案</sup>ず<sup>る</sup>不<sup>レ</sup>耻<sup>也</sup>の<sup>ノ</sup>耻<sup>也</sup>親<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>過<sup>ヲ</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>も</sup>孝<sup>子</sup>の<sup>ノ</sup>耻<sup>也</sup>

不<sup>レ</sup>者<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>耻<sup>也</sup>  
也。疾<sup>病</sup>と<sup>レ</sup>無<sup>レ</sup>學<sup>也</sup>  
與<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>身<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>耻<sup>也</sup>  
也。志<sup>意</sup>正<sup>ル</sup>ら<sup>レ</sup>  
不<sup>レ</sup>者<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>德<sup>ト</sup>之<sup>ノ</sup>  
耻<sup>也</sup>親<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>過<sup>ヲ</sup>  
諫<sup>ス</sup>不<sup>レ</sup>也。孝<sup>子</sup>之<sup>ノ</sup>  
耻<sup>也</sup>也。

榲檀ハ兩葉ヨリ香ク。孝子ハ幼而名あり。君疾有て藥を飲玉ハ。臣先之と嘗也。親疾有て藥を飲玉ハ。子先之を嘗也。夫天之物を生ずる。必其材小因て篤す。故に植する物ハ

榲檀兩葉香 孝子幼而名

君有疾飲藥 臣先嘗之也

親有疾飲藥 子先嘗之也

夫天之生物 必因其材篤

故植物培之 傾者覆之也

榲檀ハ唐木葉檀葉檀の類之由葉より香ク孝子ハ幼して名あり君疾有て藥を飲めり臣先之を嘗て

之に培傾者ハ之を覆也

茶を飲めり孝子ハ幼して名あり君疾有て藥を飲めり臣先之を嘗て

身と爲んと欲するに四有恭

ふれば則惠ふ

於遠る敬すれば則人之を愛む。忠なまば則

欲為身有四恭則遠於患

敬則人愛之 忠則和於衆

信則人任之





子甚其妻に宜  
けれども親悦  
不バ則出す。子  
其妻と宜不  
も。父母是善と  
曰夫婦之禮を  
行て。身と終ま  
で衰不也。婦の  
舅姑に於事  
と。父母小於事  
如婦人ハ人よ  
於伏す。專制す

子甚宜其妻 親不悦則出

子不宣其妻 父母曰是善

行夫婦之禮 終身不衰也

婦事於舅姑 如事於父母

婦人伏於人 無專制之義

子甚其妻に宜けれども親悦  
不バ則出す。子其妻と宜不  
も。父母是善と曰夫婦之禮を  
行て。身と終まで衰不也。婦の  
舅姑に於事と。父母小於事  
如婦人ハ人よ於伏す。專制す

の義無

三從之道有家  
小在てハ則親  
に從人ハ適て  
ハ則夫に從夫  
死をレバ則子  
に從敢て自遂  
所無教令門と  
出不支饋食の

舅姑に事ると父母に事るとは婦人ハ人ハ伏すものと云ふは若し其の  
義ハ一礼記ハ出る文之没也と書けるは夫と曰ふは夫ハ我ハ夫也  
身ハ死するは死するの終身ハ終るものと云ふは夫の死するは夫の  
没せず其の終るは夫の没せず其の終るは夫の没せず其の終るは夫の没せず

有三從之道 在家則從親

適人則從夫 夫死則從子

無所敢自遂 教令不出門  
食在饋食間 父母尊而不親



孝子之老を養  
其心を樂令而  
以て其志小違  
不其耳目を樂  
令飲食を以て  
忠養す。是故孝  
子者親の愛を  
所之を愛し。  
親の敬する所  
之を敬し。犬馬  
小至まが盡く  
然り。而を況人

孝子之養老令樂之  
以不違之志令樂其耳目  
以飲食忠養是故孝子者  
親所愛也之親所敬也之  
至犬馬盡死而況於人乎

小於と乎。

耕ハ天之道を  
用耘ハ地之理  
に因身を謹用  
を節み而以て  
父母を養可光  
陰ハ過易也親  
小事日哉惜  
可。

耕用天之道 耘固地之理  
謹身節用而可養父母  
光陰易過也可惜事親日

愛敬する所を敬し、犬馬の至るまで盡くして、  
人小於とてや、是も礼記に出る所也。

天之道、春夏秋冬の時に依りて、  
地之理、土の性質に依りて、  
父母を養ふに、  
光陰易過也、  
小事日哉、  
可。

物盛かれは則  
 必衰隆有を還  
 替と有速に成  
 堅牢なら不  
 亟に走ば多  
 顛躓灼くこと  
 園中の花早發  
 還先萎遲く  
 潤畔の松鬱  
 くとして晚翠  
 と含

物盛烈必衰有隆還有替  
 速成不堅牢亟走多顛躓  
 物園中花早發還先萎  
 遲潤畔松鬱今晚翠

是れ小學に於ける范質字の文素を身言官ふより後子の  
 果小曉は詩の内ふ出る句物盛ふれば必衰隆とあれ  
 還替あり速成不堅牢と亟に走ば多顛躓と  
 はまづとあらぶ物園中の松鬱と還先萎と

人之非ハ見易  
 己ガ非ハ見難  
 也是故に人之  
 目ハ千里の遠  
 と照すと雖我  
 睫と見と能不  
 カ千斤を揚と  
 雖我身を揚る  
 と能不敬怠に  
 勝者ハ吉怠敬

易見人ノ非雅身己非也  
 是故人ノ目雖照千里遠  
 不能見我睫雖力揚千斤  
 不能揚我身敬勝怠者吉  
 急勝敬者滅義勝怠者從

とみどりちをる潤畔の松鬱とくして晚翠と含とあらん  
 物の為理成速くことと急と敬の句と略せり

小勝者ハ滅義  
欲に勝者ハ從  
欲義小勝者ハ  
凶。

教者長可不欲  
者縱みす可不  
志者滿可不樂  
者極可不君子  
ハ狎ととも而  
敬し畏るれど

欲勝義者凶

この如ふ人の眼の千里の遠を  
照せども却るるをくも睫也

見ば小行の重と揚もとも我が身とあげがごとし教乃  
意に勝たし一息の教に勝たし一の滅ぶ我の軍の軍に  
欲人の心之我を以て欲み積りたふ後ひ欲我小積り  
は之の凶事道とよりり是人世のありとぬなり

教者不可長 欲者不可縱

志者不可滿 樂者不可極

君子狎而敬 畏而愛之也

も而之を愛を  
也。

愛すれども而  
其惡を知憎ど  
も而其善を知  
積ども而又能  
散し安く而能  
遷君子之行者  
明の爲に節を  
信べ不闇の爲

教者長くは欲に從にすべくはかのれ教み積りてよく  
抑ぐ志ハ滿べくは樂ハ極べくは是皆己が身の  
毒と成りてまじき事なり一死ハ滅亡とすまじく君子ハ狎近けども  
敬いと忘れぬ威畏あがく衆の及ぶるは是を全するは力也

愛而知其惡 憎而知其善

積而後能散 安而後能遷

君子之行者 不為明節

不為闇信 不為利義

に禮を廢せ不  
利の爲小義を  
棄不耳日に役  
せ不バ則百度  
惟日に貞。

# 不役耳目則百度惟日貞

免すれども其を欲せざるを知らず大徳を以て  
道に實に横行するも時に依て情を教へ人の難を救ふ  
安んずるや其の如く我に遷り君子のする如く君子の如く  
ぬある如く其を依せざる如く周を以て礼を廢せ中庸に云  
君子の及ぶ如く其の及ぶ如く其の及ぶ如く中庸に云  
見ざる如く戒慎しつゝ其の及ぶ如く其の及ぶ如く  
はあり壁に耳ありと先人の見ざる如く其の及ぶ如く  
くは中庸に云く其の及ぶ如く其の及ぶ如く  
なるといへり又已が爲る如く其の及ぶ如く其の及ぶ如く  
耳不也と目不見ると心是に在ると人情のつゝと耳目の欲

人を玩べバ則  
徳喪物を玩

無益の害を作  
不バ功益日に

成就す異物を  
貴不バ則人乃

用物足夙夜小  
勤不と勿也。

玩人則喪徳 玩物則喪志

不化無益害 功益日成就

不貴異物則 人乃用物足

夙夜勿不勤

物と玩と古器古物を好く不金万金を惜ば貧窮を去る

細行を於つ欽不  
累つ終に大徳を  
九つ可山を爲  
一つ箒を虧ず天  
ハつ克敬につ親  
ク人ハ仁有に  
于つ懷神ハつ克誠

ある志を喪ふと爲すの害とあるはと云ふ歎を以て  
民の田畑を害し糧を辛苦の業成妨ぐ異物を生ずるは  
奇樹遠來此奇種異田を資むるは今日要用の物不足ある  
と也此節と凡に夜小難く徳をつとむるは君子の行あり

不つ欽於細行終可累大徳

為山雖九仞功不虧一簣

天親于克敬人懷于有仁

神享于克誠聖圖念作狂

あるにつ享聖  
も念つと罔つとバ  
狂つと作つ狂も克  
念つバ聖と作つ

狂つ克念つ作つ聖つ

とつども功一簣も虧ず八尺を仞と云九仞と云九仞の言  
と云唯一簣ハ九仞之と云九仞ハ九仞の言

ほりりて出たは人の丹精ハ神たるも神たるは人の  
天ハ克敬小親人ハ仁有に懷神ハ克誠あるに享聖あり

念つとたなれつ狂つと作つ聖つと念つと作つ聖つと念つと作つ聖つ

も我つにけつをつ窮つしつてつ檢つ査つをつ行つはつるつにつたつりついつりつ打つ撃つはつるつ

君子之道者貴  
と辭して賤と

君子之道者辭貴不辭賤



辭ハ不ズ富ヲを辭セ  
して貧シを辭セ  
不ズ善カれバ則チ  
能ク人ヲを稱ス過ス  
あまリ又モ己ヲを  
稱ス故ニ小シ争シ亂ス  
自ラ亡ス忠ニ孝ノ人ハ  
惟ニ多ク君子上ニ事ス  
小シ事也衆ヲを救フ  
の徳有と雖モ人ハ  
に君ニ事スる心有  
不ズ仁ノ之厚故也

辭ハ富ヲ不ズ辭セ多ク善カ則チ然レ稱ス人ヲ

過ス行ハ又モ稱ス己ヲ故ニ争シ亂ス自ラ亡ス

忠ニ孝ノ人ハ惟ニ多ク君子上ニ事ス也

雖モ有テ救フ衆ヲ徳有不ズ有テ君子心ハ

仁ノ之厚故也  
君子の道ハ考ヘて稱スて後ニ辭セ世ニ富ヲを稱スて多クを稱ス

世ニ論ス語ハ小シと富ト人ノ欲スる所ニあれバそノ厚シにあらズんばとありテ若シ仁人を稱スるハ又モ己ヲを稱スるハ不ズ

故ニ恭ニ儉シて

仁ヲを求ム信ニ讓シ

て以テ禮ヲを求ム

自ラ其ノ克ヲを尚ム不ズ

自ラ其ノ身ヲ尊ム不ズ  
己ヲを卑シ而シ人ヲを  
尊ム心ヲを小シ而シ義ヲ  
を畏ル以テ君ニ

争シ亂ス自ラ亡ス世ニ忠ニ孝ノ人ハ多ク一ニ義ノ時ニ當リ  
かるハ多クを稱スるハ不ズ有テ君子心ハ  
君子上ニ事スるハ仁ノ之厚故也  
若シ仁人を稱スるハ又モ己ヲを稱スるハ不ズ

故ニ恭ニ儉シ求ム仁ヲ信ニ讓シ以テ求ム禮ヲ

不ズ自ラ尚ム其ノ克ヲ不ズ自ラ尊ム其ノ身ヲ

己ヲを卑シ而シ人ヲを尊ム心ヲを小シ而シ義ヲ

求ム以テ事ス君ニ得テ自ラ為ス是ト

事<sup>コト</sup>を得<sup>トク</sup>とを  
求<sup>モトメ</sup>之<sup>ノ</sup>を得<sup>トク</sup>バ自<sup>ラ</sup>  
是<sup>レ</sup>と爲<sup>ス</sup>得<sup>ズ</sup>不<sup>レ</sup>  
も又<sup>モ</sup>是<sup>レ</sup>と爲<sup>ス</sup>自<sup>ラ</sup>  
以<sup>テ</sup>天<sup>ノ</sup>命<sup>ヲ</sup>を聽<sup>ク</sup>

君<sup>ノ</sup>子<sup>ハ</sup>敬<sup>ム</sup>不<sup>レ</sup>  
と無<sup>ク</sup>身<sup>ヲ</sup>を敬<sup>ム</sup>す

不得<sup>ズ</sup>又<sup>モ</sup>是<sup>レ</sup>を自<sup>ラ</sup>以<sup>テ</sup>聽<sup>ク</sup>天<sup>ノ</sup>命<sup>ヲ</sup>

恭<sup>ニ</sup>儉<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>事<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>は、  
心<sup>ヲ</sup>を物<sup>ニ</sup>を濫<sup>ス</sup>と  
又<sup>モ</sup>是<sup>レ</sup>と爲<sup>ス</sup>自<sup>ラ</sup>  
以<sup>テ</sup>天<sup>ノ</sup>命<sup>ヲ</sup>を聽<sup>ク</sup>

君子<sup>ハ</sup>無<sup>ク</sup>敬<sup>ム</sup>身<sup>ヲ</sup>を大<sup>ニ</sup>也<sup>ナリ</sup>

るを大<sup>ニ</sup>ありと  
爲<sup>ス</sup>也<sup>ナリ</sup>何<sup>ヲ</sup>を以<sup>テ</sup>

謂<sup>フ</sup>君子<sup>ハ</sup>過<sup>リ</sup>て言<sup>ハ</sup>

へども則<sup>チ</sup>人<sup>ハ</sup>皆<sup>ク</sup>  
以<sup>テ</sup>辭<sup>ヲ</sup>と爲<sup>ス</sup>過<sup>リ</sup>

て動<sup>ク</sup>ども則<sup>チ</sup>法<sup>ヲ</sup>  
と爲<sup>ス</sup>故<sup>ニ</sup>に言<sup>ハ</sup>辭<sup>ヲ</sup>

を過<sup>リ</sup>不<sup>レ</sup>動<sup>ク</sup>て法<sup>ヲ</sup>  
或<sup>レ</sup>過<sup>リ</sup>不<sup>レ</sup>則<sup>チ</sup>命<sup>ヲ</sup>を

不<sup>レ</sup>ども人<sup>ハ</sup>敬<sup>ム</sup>恭<sup>ニ</sup>  
に。

何以<sup>ヲ</sup>謂<sup>フ</sup>敬<sup>ム</sup>身<sup>ヲ</sup>君子<sup>ハ</sup>過<sup>リ</sup>言<sup>ハ</sup>則<sup>チ</sup>

人<sup>ハ</sup>皆<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>爲<sup>ス</sup>辭<sup>ヲ</sup>と動<sup>ク</sup>則<sup>チ</sup>法<sup>ヲ</sup>

故<sup>ニ</sup>言<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>過<sup>リ</sup>辭<sup>ヲ</sup>動<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>過<sup>リ</sup>法<sup>ヲ</sup>則<sup>チ</sup>

不<sup>レ</sup>命<sup>ヲ</sup>人<sup>ハ</sup>敬<sup>ム</sup>恭<sup>ニ</sup>

と云<sup>フ</sup>これに充<sup>テ</sup>て身<sup>ヲ</sup>を敬<sup>ム</sup>すは、  
辭<sup>ヲ</sup>と云<sup>フ</sup>は、初<sup>メ</sup>に法<sup>ヲ</sup>とせしむるに、  
是<sup>レ</sup>を命<sup>ト</sup>せしむるに、

命<sup>ト</sup>を命<sup>ト</sup>せしむるに、  
命<sup>ト</sup>を命<sup>ト</sup>せしむるに、  
命<sup>ト</sup>を命<sup>ト</sup>せしむるに、

言之行不過と  
と恐名之行よ  
過と或耻天運  
行して已不日  
月交て相從而  
其久を閉不為  
と無而物成已  
小成而明也嘉  
有有と云と雖  
食不バ旨を知  
不至道有と云  
と雖學不バ善

恐言するは行  
恥名するは行

天運の不已  
日月交相從

而不因其久  
每為而物成

已成而明也  
雖云有嘉者

不食不知旨  
能云有至道

不學不知言

言の行不過と  
名の行よと  
名の行よと

を知不

儒ハ金玉を寶  
とせ不忠信以  
て寶と為土地  
を祈不而仁義  
成土地と為多  
積を祈不而多

儒不寶金玉  
忠信以為寶

不祈去地而  
仁義為土地

不祈多積而  
以多文為富

論語に云く  
天運の不已  
日月交相  
從也  
雖云有嘉  
者  
不食不知  
旨  
能云有至  
道  
不學不知  
言

文を以て富と爲す。

君子之道者譬  
如堤坊の如與  
人の足不所を  
坊人の足不或  
坊と雖人猶以  
て之を踰人者

備道に金とを宝とせざる中、文の大學に亡人の親を仁むを  
宝と爲し、晋の文公も耳に舅子把が教て云せし辭之唯  
若くは宝と爲ともあり、土地を廣くせんを以て仁義  
の爲と土地と多積を以て多文を富と爲と云も  
仁の門に米穀令積を積んと思はば、文多くんは、  
んが富と爲積の音の之の、い、あ、の、の、者、也

君子之道者譬如堤坊與  
坊人所不足雖坊人不足  
人猶以踰之、人者生於三

三に於生は之  
に事ると一の  
如矣。父之を生  
君養師又之を  
教也。父に非は  
則生せず。食小  
非とバ則長ぜ  
不。教小非とバ則  
知不。生に報る  
ハ則死を以し。  
賜小報るハ則  
力を以て是人

事之如一矣。父生之君養  
師又教之也。非父則不生  
非食則不長。非教則不知  
報生則以死。報賜則以力  
是人之道也

人の思ふと坊は、  
坊は、人、  
論、  
これ、  
四十一

之道也。

人に三の不祥  
有幼而長小事  
不賤而貴に事  
不肖小して  
賢に事不酒ハ  
謹厚の性を移  
化して凶險の  
類と爲富者ハ  
其身を損し貧  
者ハ其家を破

世に教ふおぼやかしむる生かすの心は死にむく楊小報の力を以て  
くる三恩あれば死にむくむひつるもさむくむく世人の心

人有三不祥幼而不事長

賤而不事貴不肖不事賢

酒後謹厚性化為凶險類

富者損其身貧者破其家

古今傾敗者歷く又是多

古今傾敗の者  
歴く又是多

人に三の不祥といふ幼少して長者小事は後して去に事  
不肖や賢に事ば是二つ人の不祥之酒ハ謹厚性を  
移して凶險類となす富る者ハ其身を損し百病  
を生ず貧者ハ其家を破り古も今も傾き攸る者歴くと  
して又是多一禹ハ旨酒を飲んぐ若云を相伝と福治と  
あり書經に酒清の爲あり酒を飲ぐるは人を損す又

小学小酒ハ粗茶のて佳味にあふばとあり酒ハ量なり  
乱に及ぶと福治の穉をちりべし攸して其用のもの

雖賢多財則易損其謹志

愚而多財則必盡其財

賢ありと雖財  
多ハ則其謹志  
を損し易し愚  
而財多ハ則必

其過失と益謙者人の至徳あり。高と雖必危り。溢不者ハ是謙之道也。是故天道者盈を虧而謙小益地ハ盈を變トて謙小流神ハ盈を害して謙に福す人ハ盈を

謙者人至徳雖高必不危

滿而不溢者是謙之道也

是故天道者虧盈而益謙

地盈而流謙神害盈福謙

人急盈好謙故君子有終

賢ありといふも材多れば謙志を換ト過愚りて材多れば必も過失と益謙ハ人ハ盈を

惡で謙を好す。故に君子ハ終を有つ。

世之名門と見るに先祖の忠孝に由て之を成立せ不ハ莫子孫の奢傲由て覆敗せ不

徳之恒ありといふも危きは終る上滿れども溢るることのい先謙のたあり是故ハ天ハ盈を虧て謙小益地ハ盈を虧て謙小流神ハ盈を害して謙小福人ハ盈を好む故に君子ハ終を有つハ天ハ盈を虧て謙小益地ハ盈を虧て謙小流神ハ盈を害して謙小福人ハ盈を好む故に君子ハ終を有つ

見世之名門由先祖忠孝

莫不成立之由子孫奢傲

由て覆敗せ不之由子孫奢傲

ハ莫。成立之難者。譬バ天小升如也。覆敗之易者。又毛と燎ダ如也。之。以て心小徹。宜骨小刻宜者也。童蒙と教訓せん爲。經傳從拔萃す見者之と笑と勿と。

譬如升天也 覆敗之易者

又如燎毛也 言之以徹心

宜刻骨者也 為教訓童蒙

從經傳拔萃 見者勿笑之

世の名ある門と見何小いづれも先程の忠孝よ由く教と成まると。孫之子孫の奢傲小由く。西漢故さるいほ。あまひい先程の大。家よて今いづらに福と減少せし。今世の世も成まると。名門となるさゆぐあり成立の

うらいた天小升るがごとく、覆敗の易い毛と燎よりて。此これと云く心小徹骨に刻むべし。童蒙と教訓せん。此聖人の經傳人の傳より。拔萃す。此多くあつまること。此ぬさむ。此たり見者之と笑と勿と。福遇の祥と。

孝子教終

明治十四年六月廿四日版權免許  
全 年九月十五日出板

定價 十錢

講解人

高井蘭山

故人

出版人

内藤泰次郎

東京日本橋區通鹽町十一番地

發兌人

内藤傳右衛門

山梨縣下甲府常盤町四番地

136  
124



